

さて、前回の実践論では、『移行対象』の心の杖としての大切さを、それを簡単に取り上げることの理不尽さを解説しましたが、今回はそれを引き継ぐ形で、その解決編について述べていきましょう。

M男さん、長さ10cmほどの糸や紐を、唇で挟んでは、ピーッと引っ張っては、くるくると振り回すということを、もう何年もの間、繰り返しています。この紐、適当な紐状のものが手元に無いと服でもタオルでも、その繊維を引き出してしまうので、職員はいつでも何本かの紐が本人の手元にあるように、常に配慮をし続けていました。M男さんの母は、彼が一才の時に白血病で亡くなっています。父親は複雑な家庭事情により、首都圏にお住まいで、面会や帰省が困難でした。彼は「泣かない、泣かない」と叫んで泣く人でした。それは、自分の感情を、特に否定的な感情（寂しい、悲しい、怒り etc）を表現するのに自らブレーキをかけている人だということです。お母さんが一才の時に亡くなっていて、父親が遠く離れたところに住んでいて寂しくない人っていないですよ…。県内にお住いの祖母とのやり取りの充実、父親との二週間に一回の電話でのやり取り、最後には祖母の古いアルバムから頂いた母の写真、それをポケットの中に入れて持ち歩くことができるようになったとき、彼は紐を持つ必要がなくなっていました。紐は、亡き母との絆を象徴する『移行対象』だったのです。

R子さん、いつも担当の職員とのお別れで大騒ぎです。退庁時はもちろんのこと、少し現場を所要で離れるだけで、泣いたり、大声を上げたり、他の利用者を叩くはで、大混乱です。スケジュールを活用しても、全く行動は変わりません。そこで考えたのが、テレビ番組録画ビデオテーププレゼント大作戦です。Rさんが、その当時大好きだったキムタクの主演ドラマを、担当の職員がひたひたと録画してきて、彼女にプレゼントするのです。つまり、そのビデオテープを担当

職員の『移行対象』に仕組むことで、担当職員との別れた後でも、彼女の手元に担当職員がまだ居続けているような心理状態を作ろうとしたのです。そして、それは成功を収めました。彼女は、一日の多くの時間を、その録画ビデオを見て過ごし、別れの場面でも過剰な反応を示すことが少なくなっていたのです。しかし、彼女の人生の課題は、担当職員との別れではなくて、もちろん、その奥にある母親との関係です。その解決には、その後10年の月日が必要だったのですが、最後には、母と娘、マクドナルドへ穏やかに出かけることができるようになって、一定の幸福にたどり着いたのです。

H男さん、帰省すると必ず父、母と買い物に出かける人です。ある意味、まだ愛情がお金の段階で、とどまっている人だと言えます。その彼、なかなかその買って貰った物を手放すことができません。重いCDデッキ、お菓子の箱が入っていた、もうすでに空の買い物袋、財布…etc、食事、移動場面、なかなか荷物が邪魔になって大変そうです。そこで一計。次の帰省日を伝える父と母と実家の写真、そして買い物の写真、それをカードにして渡すと、彼はそのカードを持ち歩くことで、他の荷物を持ち歩く必要がなくなりました。父や母の買って貰った物が、父や母の『移行対象』、職員が用意したカードは、担当の職員の気持ちも重ね合わせた『モバイルな移行対象』になりました。これなら、どこを歩いても、どこに出かけても、全く問題ありません。もちろん、H男さんにも、これから解決すべき親子の課題があります。いつまでも愛情がお金では、幸福になれるはずがありませんから…。

『移行対象』は、このようにして、いつでも、その人が幸福になるための支援を提供する大きなヒントになっているのです。見ず見ず見逃しては、全くもって、もったいないということになります。